

ウポポイ案内人

マルシェノルド編集主幹 小磯 修二

7月12日、白老町にウポポイ（民族共生象徴空間）が開業した。私は前日の開業記念式典に参加した。コロナの影響で限られた人数であったが、ポロト湖畔の澄み切った青空の下での心に残る式典だった。主催者として挨拶した菅義偉官房長官は、今後政府としても全力でアイヌの皆様に寄り添った政策の推進に努めていくと力強く語り、また北海道アイヌ協会の加藤忠前理事長は「北の大地に登場した新しいアイヌ施策推進の扇の要であるウポポイが必ずや人類の和合、共生の精神に寄与するナショナルセンターとなることを確信する」と感無量の思いで語った。アイヌ文化を世界へ発信する拠点の式典に臨みながら、私は30年前を懐かしく思い出していた。

私は、1990年代初めに北海道開発局室蘭開発建設部に勤務していたことがある。そのときに白老町役場の人たちとの交流が始まった。きっかけは、私が長く総合計画の仕事に携わっていたことから、役場の若手職員が白老町の総合計画の相談にきたことであった。それまでは東京勤務が長かったので、地域との交流は私にとっても願っていたものだった。当時白老町は、「元気まちしらおい」のスローガンで新しい自治体政策に挑戦していた時期で、私も役場の若手職員と一緒にまちづくり議論に参加した。民間のCI（コーポレート・アイデンティティ）戦略を自治体政策に取り入れるという先駆的な取り組みなどを進めており、私にとっては、地方の現場で地域政策に触れる貴重な経験であった。その翌年に東京に戻ったが、白老町との縁はその後も続き、東京在住者を中心に、ノーザンライツという白老町のまちづくり応援団をつくり、官庁職員、ジャーナリストや大学研究者、さらに外国人も加わって、その後しばらく東京や白老で交流の機会を持っていた。

記念式典が終わった後に内覧会があり、私は国立アイヌ民族博物館を訪れた。洗練された多様なアイヌ文化の展示に時間を忘れていたが、そこで思いがけず30年前に交流していた元白老町職員の坂東雄志さんと偶然に出会った。彼は博物館のガイドをしていた。もともと長く白老町で計画業務に携わっており、初めて私を訪れてくれたメンバーの一人であった。ウポポイ実現の基盤には、当初から白老町が総合計画のなかで国際的な民族文化の交流拠点を位置づけ、その後広域的な地域計画でもしっかり位置づけていった経緯がある。彼は計画に長く携わり、中核イオルが白老町に選定された際にも関わっていた。その誇りを大切に、退職後は「ウポポイ案内人」として、ウポポイを訪れる人々へアイヌ文化の多彩な魅力を伝えていくという。

プランナーの醍醐味^{だいごみ}の一つは、長い時間をかけながら計画の施策、事業が形を持って実現したことをその目で確認できたときだ。これまでウポポイ実現に関わった多くの人々がそれぞれの想いでウポポイの開業に拍手を送っていることだろう。